

SHIRO PAPER EARTH



Issue
0
January 2023

B2 PROJECTS

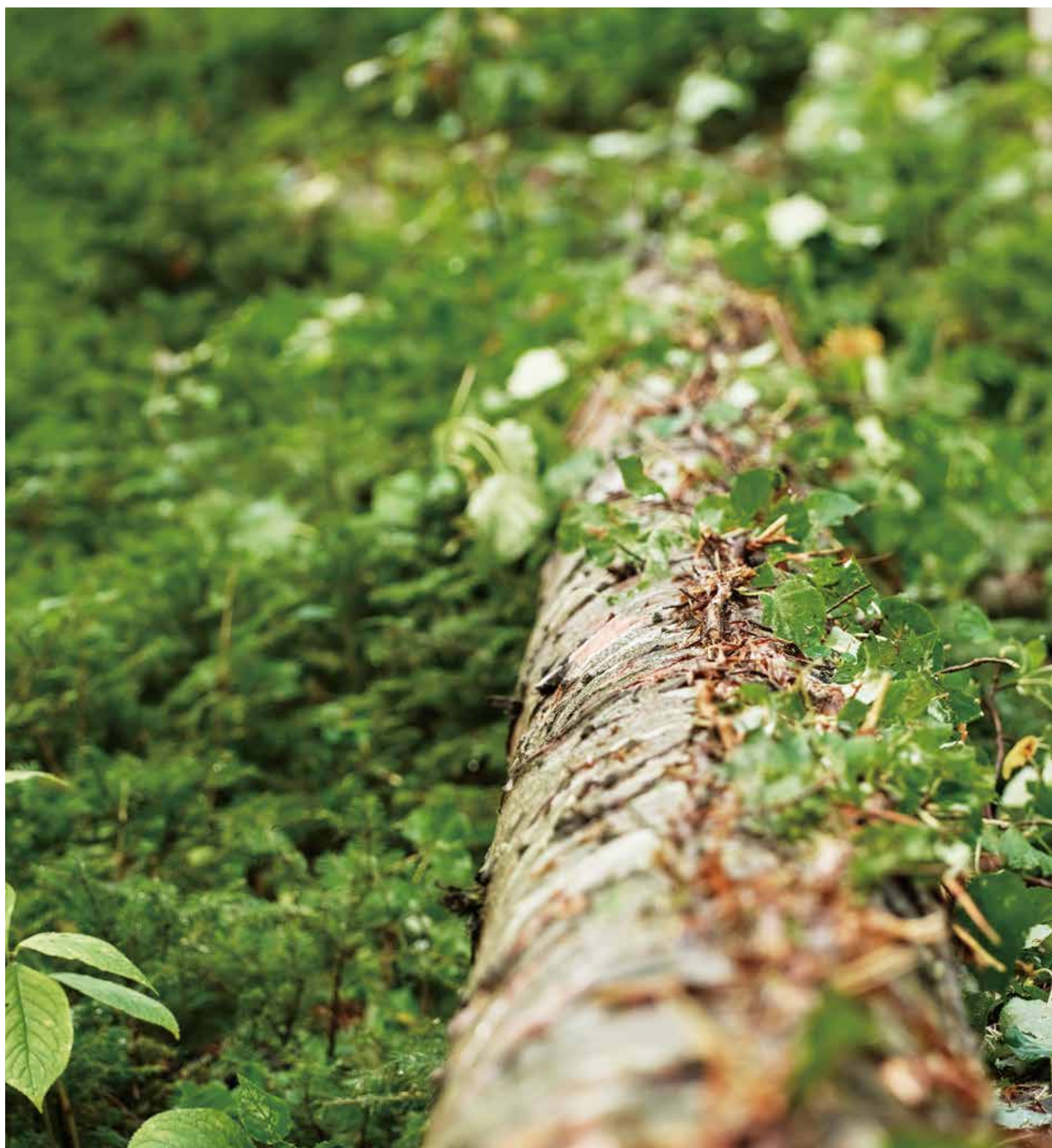
まちづくり・森づくりなど
あらたなプロジェクトに取り組む
SHIROの根底にある想い

A2 GAGOME KOMBU

素材の生産者を訪ねる旅
がごめ昆布の生産地
北海道函館市を訪ねました

A4 BACK TO BASICS

ブランド創設者の今井浩恵が
SHIROの歴史を振り返ります
そして次の目的地は



生産者やまちを中心に考える。 まちづくり・森づくりの根底にある、 SHIROのアイデンティティ

私たちは生産者の視点で考えます。
自然以上のものづくりはしないんです——。

SHIROは今、まちづくりや森づくりなど、
新しい領域に挑戦しています。
なぜ？と思われるかもしれません。
私たちの中ではすべてつながっています。
製品も、森も、まちも、関わるものはすべて、
創業以来大切にしてきたアイデンティティに基づいているからです。

ものづくりや子どもたちの支援・観光などをテーマに
施設や環境を市民とつくる「みんなのすながわプロジェクト」。
森を中心とした設計思想による一棟貸し宿「MAISON SHIRO」。
これらのプロジェクトがどうして始まったのか。
ブランドプロデューサー今井浩恵に話を聞きました。

Photographs: MONOCYTE (B3, B4), SHIN SASAKI (B2) / KEI FURUSE (B5)
Text: SHINTARO KUZUHARA

コロナ禍で気づいた、 本当にやりたいこと

—— SHIROが森づくりやまちづくりに関わるなんて、とても驚きました。
どうして化粧品以外のプロジェクトを進めているのでしょうか。

コロナ禍を経て「SHIROとは何か？」という問いに立ち返ることができたんです。私たちは2010年代後半から本格的に世界を目指しました。各国を代表するラグジュアリーブランドと肩を並べるべく、世界中を飛び回り続けてきたんです。

—— かつて世界中を飛び回ったことで、国を越えてさまざまな文化圏のお客様に製品を届けることができるようになりました。

よい製品だから、より多くの人に使ってほしいというシンプルな想いでした。その一方で、違和感が蓄積していたんです。店舗やスタッフを増やし、トレンドを追いかけて、規模を拡大すればするほど「ただ消費を煽っているだけなのでは……？」と不安が大きくなっていきました。あのままいけば、心か身体が壊れていたかもしれません。すっかり疲弊していたんですね。

そんなときに、新型コロナウイルスによるパンデミックで世界に急ブレーキがかかりました。突然目の前に現れた、予定が何も入っていない膨大な時間。それを使い「私たちが本当にやりたいこと」について、ずいぶんと考えました。

—— やりたいことってどんなことだったんですか。

私は社会を良くしたいんです。それが大人の義務だと思っています。SHIROというブランドのちからで、社会を良くしたい。

私たちは創業当初から、信頼できる生産者より自然の恵みを買取らせていただき、製品をつくっています。収量が多ければたくさんつくり、少なければつくれるだけの量しかつくりません。私たちの判断基準は、生産者。自然以上のものづくりはしないんです。そうすることで、良い素材をつくる生産者のビジネスを支えることができます。

こうした自然に根ざした思想で、SHIROはたくさんの人に愛していただけるブランドになりました。つまり、私たちが利益を生み出せているのは、さまざまな自然の恵みや生産者のおかげなんです。であるならば、SHIROの利益を今度は地球や社会に返していくべき。これまでもSHIROでは、さまざまな形でお返ししてきましたが、より本質的に循環の形をつくりたいと考えるようになりました。

その頃、SHIROの新工場建設の話が同時に進んでいたんです。規模が拡大することによって同時に広がっていった外注生産率を抑制するために、より生産力の高い工場が必要でした。



—— 東京にある本社との連携を考えれば、関東近郊に新工場を建てたほうがいいですね。

関東近郊には建てたいと思えなかったんです。そんなとき、創業の地である砂川に、小学校の跡地があることを思い出しました。そこを思い出した時に「ここだ！」と思ったんです。もちろん、砂川への恩返し的心思もあります。とはいえ、問題は山積みでした。根本的な問題は人口減少です。高校卒業をきっかけに、砂川を出ていく人は多い。工場を建設しても、働き手がいなければ未来がありません。魅力的な人がどんどんいなくなってしまようなまちにはなってほしくない。それなら魅力あるまちにしていけばいいじゃないですか。



北海道砂川市の新工場の屋上からの風景。

生産者に合わせて 製品をつくってきたから 森に合わせて建物をつくる

—— SHIROとまちづくりの関係はだんだんわかってきました。SHIROと森づくりの関係は何から始まったのでしょうか。

ここ1〜2年ほどで、これまでに会ったことのない人たちに会い、行ったことのない場所に行き、SHIROの可能性を広げていこうとしています。さまざまな出会いがありましたが、森づくりのきっかけは札幌のシェフ・高尾僚将さんでした。彼のレストラン「TAKAO」は、野生植物の味や香りをテーマにしています。自ら森で採取した植物を乾燥させたり発酵させたりして、どんな香りや風味が生まれるか常に実験しているんです。これまでSHIROの製品をつくるためにあらゆる生産者を訪ねてきましたが、彼の店にはまったく見たことのない素材が標本のように並んでいました。衝撃でした。

高尾さんと話していると、SHIROと同じだって気づいたんです。彼は森が生み出す素材から料理をつくります。料理に合わせて素材を調達するのではなく、素材に合わせて料理をつくっている。SHIROも同じように製品をつくってきました。でも私はまだ、森には行ってなかったんです。海にも畑にも通っていたけど森のことは何も知りませんでした。

—— そこで森に興味が湧いたんですね。

森に入るようになり、木こりと出会いました。彼らは何百年単位で森のことを考え、育てています。畑の野菜は1年で育ちますよね。果樹なら5～10年。森で木が成長するには50年以上かかるから、木こりは百年単位で考える必要があるんです。それに森ってすごいんですよ。地球温暖化の原因となる二酸化炭素を吸収する植物を育てるし、果実や木の実を育てるし、それらを食べる動物を育てる。なんといっても日本の国土の7割は森なんです。大きな可能性を持っているのに、適切に管理されていない森が多すぎて、その多くが可能性を発揮できていません。

そこで私たちは、北海道の長沼町で「MAISON SHIRO」という一棟貸しの宿を始めことにしたんです。このプロジェクトは、森からいただける資源から建築物の規模や中身を決めていきます。建築物ありきで資源を使うのではなく、資源ありきで建築物を建てる。今はこのやり方を理解してくれる人は少ないですが、10年後にはスタンダードになっていると思います。昆布を使って製品をつくったときも、最初は理解されませんでした。でも今ではベストセラーの製品です。同じことだと思っています。

まちづくりや森から見えたもの

——サラッと言いますが、一般的なものづくりやプロジェクトの進め方と、まったく違うアプローチですね。

そうです。でも、SHIROはずっとそういうものづくりを続けてきた。SHIROが続けてきたものづくりの姿勢を、森で実践しているんです。こうして森に入ったことをきっかけに「みんなのすながわプロジェクト」も軌道修正をすることに。

—— 軌道修正？

はい。というのも「みんなのすながわプロジェクト」の施設建築を始めた時点では、森に出会う前だったので、一般的な建築の常識で進めている部分も少なくなかったんです。「これだけの規模の建築だからこれだけの材料が必要だね」と。でも、これはSHIROらしくないと気づきました。変更できる部分を見直し、軌道修正したんです。右の写真で私が見上げているのは、北海道北竜町の山から伐り出されたカラマツの間伐材を使った施設の外壁です。プロジェクトのために新しい木を伐り出すのではなく、間伐した寿命間近の劣勢木などを外壁にしました。森に光を入れ木々の成長を促すなど、森を守るために木こりが伐った木を使っています。



適切に間伐された森には日光が差し込み
植林しなくても芽が出て若木が育つ。

—— でも、SHIROはこれまでもこれからも、自然とともにあるブランド
なはずですよね。これまでのやり方のまま、SHIROの製品を通じてもっと
社会を良くしていけるように思いますが……。

「みんな」でやることに挑戦してみたいんです。ここ数年はみんなでやれていなかったから。世界で闘うには、世界で活躍するトップクリエイターと一緒にデザインや製品の方向性を決めていきました。少数精鋭で、どんどん尖っていかなければならなかった。でも、私は今、みんなでやりたいんです。社長を退任してまで私がやりたいことは、こういうことなんです。もっと、海に、畑に、森に足を運び、いろんな人と出会い「やってこなかったけど、やるべきこと」をやっていきたいんです。

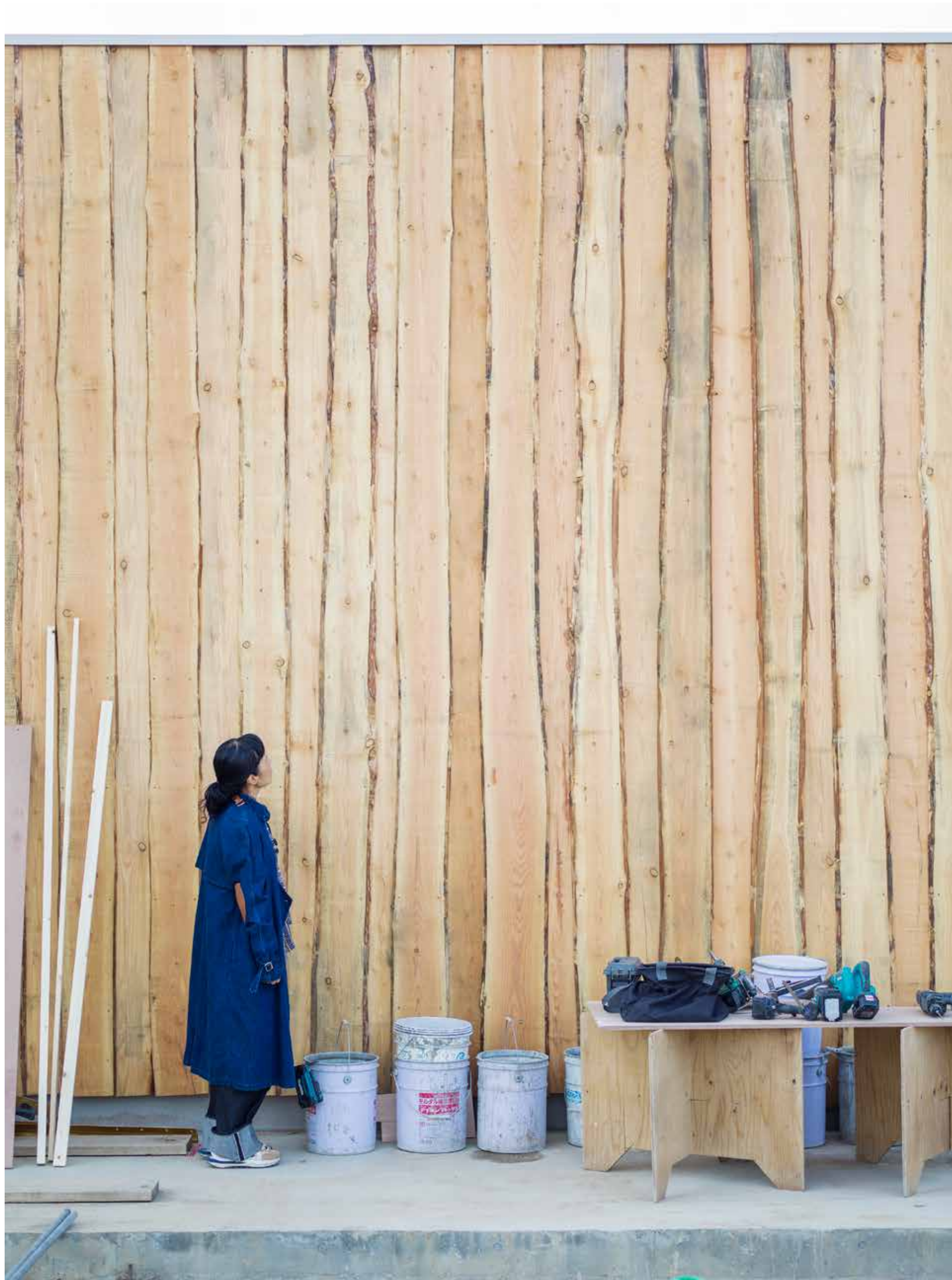
—— なぜみんなでやりたいのでしょうか？

世界的なラグジュアリーブランドを目指して高い山を登り、それなりの標高まで来ました。でも、上から眺めた景色はすごく狭かったんです。どんなに頑張っても、コスメが好きな人にしか届かない。そこで山を降りて森やまちに来たら、いろんな人がいた。SHIROがSHIROのままで頑張り続けても、絶対に出会えなかったような人たちがいたんです。そんな人たちとみんなでやったら、SHIROの可能性はどんどん広がるし、社会も良くなる。そっちのほうがいいじゃないですか。だから、みんなでやりたいんです。

2022年秋、札幌。MAISON SHIROに関わる建築家、施工会社、プロジェクトマネージャーなどが森に入り、
間伐された木をその場で確認し、木こりから建築材として直接仕入れた。



みんなのすながわ
プロジェクト
<https://shiro-sunagawajp/>
@shiro_sunagawa



北海道砂川市に建設が進むSHIROの新施設「みんなの工場」の外壁材には、
木こりが自ら伐り出し製材したカラマツの間伐材がつかわれている。